

My

COOL CHOICE

My COOL CHOICE

高木大輔

高木大輔選手インタビュー

サッカーも、エコも、
当たり前前のことを
当たり前前にやる

ホームゲームでエコ活動の
啓発を始めたレノファ山口FC。
チームの中心選手の一人、
高木大輔選手に
クールチョイスについて聞きました。



エコに関して取り組まれていることはありますか？
人間は誰でもできることが疎かになることがあります。当たり前前のことを当たり前前にするのが大切だと思います。例えばゴミの分別や節水、節電を当たり前前やる。そうしたことがサッカーにも相通ずると考えています。
選手のロッカールームにはゴミ箱が一つあり、選手が使ったティッシュなどのゴミを入れており、以前はプラスチックゴミやペットボトルが混ざっていたこともありました。自分たちが分別しなかったらゴミを集める人が苦労するのでゴミ箱のふたに「ペットボトルは分別してください」とシール

ルを貼るようにしてみたところ、これをきっかけにみんなが分別するようにになりました。自分が良ければOKではなく少し意識することで、もっともっときれいになるんじゃないかな。スタジアムもそうですし、日本全体がきれいになればいいですね。

体づくりも仕事のうち。
山口の美味しいものを
教えてほしい

地産地消もクールチョイスです。食に関するこだわりを教えてください。
スポーツ選手として自分の体が大事ですからバランスよく食べなければいけません。食べ物はもちろんですが、食べる時間も意識しています。山口に来て思うのは、スーパーの野菜が安くて新鮮だということです。地元スーパーならではの野菜のコーナーなど山口の良さを感じています。僕のお気に入りの周防大島町のミカン。とても美味しくて先日買って食べました。せっかく山口にいるので、ミカン以外でもこんな美味しい食材があるよって僕に教えてほしいです。

何かを伝える
プレーがしたい

最後にファンに向けてメッセージをお願いします。

得点するためのプレーを第一に考えているので、ディフェンスラインの背後に走るプレーなど攻守においてハードワークすることを心がけています。見ている人たちに感動や勇気など何かを伝えられるようなプレーができればと思っています。僕個人の結果が良くなればチームの順位も上がると思っていますので、フルシーズン戦える準備をして、J1に昇格するシーズンにしたいです。



© RENOFA YAMAGUCHI FC

高木大輔（プロサッカー選手）

1995年10月生まれ神奈川県横浜市出身。2018年から2年間レノファ山口FCに所属、ガンバ大阪に移籍後2021年から再びレノファ山口FCに所属。ポジションはFW。背番号18。



商品を買う
ということは、
選ぶこと。
それは、
未来を
つくることに
繋がる。

My COOL CHOICE 角 麻衣子

店主の角さんが気に入ったものが並んでいるわっか屋。
自然を壊さないことを大切に考え、
生産者にも健康にも安心なモノを揃えたいと話す
角さんにご自身の活動への思いを聞きました。

この店は当初から、人も地球も喜んでいられる暮らしを伝えたいという思いで開いています。学生時代は山口県立大学でNGOについて学び、卒業時に、あるNGOの代表から「ケニアの村人たちの仕事のものを買ってお店を作るので一緒に働かないか」と誘われました。4年間勤めている間、ケニアを始め、世界各地の生産者に正当な対価を支払うフェアトレードの商品を販売し海外支援に携わっていました。その頃夫に出会い、自然を大事にしながらモノ作りをしている地元農家の方や作家さんのことを伝えたり応援したいという思いが芽生えたことが、2人でわっか屋を作ったきっかけです。

私の好きなものの積み重ねでこの店はできています。大学卒業後、自然食品の店に食材を買いに通っていて、農薬や化学肥料を使わずに育てた野菜のおいしさや環境へのやさしさに感動しました。それ以来、生産者や自然に対する感謝がめぐるようにと、ここで働いています。



お店入口の看板

モノにはひとつずつにストーリーがあります。私たちが買い物で商品を選ぶという「選択」が世界を作っていると思います。選挙で投票するのと同じように、どんなものを買うかということが、作り手やより良いものを作る会社を応援することに繋がります。これからの未来をつくっていくことにも繋がると思っています。大量生産された安く

て便利なモノの背景には、過酷な労働や環境破壊があります。学生の頃からそういうことを学ぼううちに、
「安くて便利」ではなく、「安心や笑顔の生まれること」を選びたいと思うようになりました。

した。この店が、平和や持続可能な社会への入口であれたらと考えていますが、モノを大切に使うということも、提案したいことの一つです。例えば夫が作る木の器はできるだけ長く使ってもらいたいので修理もしますし、ほかにも、扱っているニット製品のセーターには、お直し用の糸が付属されたものもあります。

朝起きたら、 お茶を沸かして水筒に入れる

夫がもともと新生活をしていただくこともあり薪ストーブを使っています。



お店の取り組みを知ってもらうために発行している手描きの「わっか屋新聞」

では豆を煮たり、加湿用に薬草やハーブを入れてお湯を沸かします。沸かしたお湯は湯たんぽや足湯にも有効活用します。
ほかには、朝起きたらお茶を沸かして水筒に入れて使うようにしていて、お湯を沸かすたびに使うエネルギーの削減に繋がっています。

コツコツと地に足をつけて 伝え続ける

最近では持続可能やSDGsという言葉が耳にするようになりました。これまで店のお客さんの9割は女性でしたが、若い男性が興味を持ってくれることも増えてきました。中にはスパイスを買ってくれたり、健康のために調味料を全部変えたという男性もいました。海外では男性がオーガニックショップで買い物をするのはめずらしいことではありません。日本もそんな風に変わってほしいなと思います。

お店をしながら様々な活動をしてきた中で、環境や、持続可能な未来への取り組みに関心を持つ人を爆発的に増やすことは難しいと実感してきました。「人にも地球にもやさしい世の中を作っていくには、身近な暮らしの中にもできることがある。」それをコツコツと、この空間で伝え続けようと思います。築90年のこのお店の建物も土や木から作られた、まさにサステナブルなもの。この家も、私たちの届けるメッセージに、力を与え続けてくれています。

角 麻衣子 (わっか屋 店主)
1980年7月生まれ山口市在住。自然な食品やエコロジー雑貨などを取り扱う「わっか屋」を夫と2008年にオープン。月の満ち欠けの勉強会や味噌作り、ふんどし作りなどユニークな体験会も実施してきた。



カメラも、環境への関心も 趣味のダイビングがきっかけ

水中カメラマン兼フォトジャーナリストとして主に太平洋の島国、ミクロネシア連邦やマーシャル諸島共和国、国内では世界遺産の小笠原諸島や沖縄県の離島で活動しています。もともと政治家や起業家のようなみんなを引っ張っていくような仕事でした。たかっただけ、カメラや自然環境に興味があったというわけではありませんでした。が、趣味で始めたダイビングがきっかけでミクロネシア連邦に行くようになりました。あの辺りは島国が14か国あって、ガスも電気も水道もない島もあり、みなさん貧しくてGDP（国内総生産）はワースト20に入るくらいですが、それでも日本人以上に幸せな生き方をしていることに驚きを感じて通い始め、写真を撮るようになりました。

豊かな自然に変化が…

ミクロネシアの人たちにはゴミという概念がありません。ポイ捨てが当たり前。なぜかという戦前まで食器はバナナの葉っ

水中カメラマン・道城征央さんインタビュー

Think Globally, Act Locally

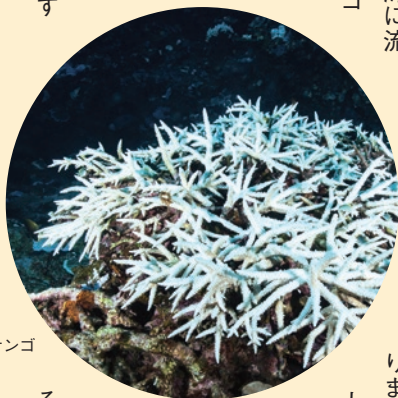
くなります。これを防ぐために現地でも環境活動をしています。ゴミの流入など環境の変化によって引き起こされるサンゴの白化は西表島や小笠原諸島でも見られ、日本の景色も変わってきていると感じます。



「自然環境を守る」のではなく 「住んでいる所を守る」 という考え方

都会の繁華街にあるゴミをカラスがつついて散乱している映像を見たことがあると思いますが、ゴミが散乱すればハクビシンなど外来の生き物が入り込んできます。クマやサルが市街地に来ることもありますよね。彼らが生きる場所は人間の社会ではありません。ゴミを散らかしているから人間の社会に来るのです。私は彼らの生きる場所を作ってあげないといけないと思っています。

ゴミがなければ山の中にいるので、住むべき場所を分けてあげる必要があります。「自然環境を守る」ではなく「住んでいる所を守る」という視点が大切で



白化したサンゴ



す。その視点は異なる生物を認め合う多様性にも繋がります。それが崩れることを

それだけの生きる場所を分けることをゾーニングと言いますが、それが崩れると人間社会にも影響が出てきます。私の考えは「ゾーニングをしっかりとしましょう」ということ。また、好きな言葉に「Think Globally, Act Locally」という言葉があります。地球規模のことを考える前にまず自分たちの足元から行動しましょうということ。山口市には山口市の問題が

て東京の人には分かりません。その土地に住む人が問題を理解し取り組むことが大切です。生物の多様性があるように人間にも多様性があり、文化、歴史、民俗という分野でお互いに尊重しあうことが重要です。

ゴミに国境なし

自然環境を考える場合、人間の生活レベルで考える必要があると思っています。だから私はボランティア団体を作って自分が住んでいる場所にある目黒川（東京都目黒区）のゴミ拾いをやっていますし、ミクロネシア連邦でも同じように現地の学生たちと清掃活動をしたり、小学校で出前授業を



Photo: Michishiro Masahiro

しています。川は海に繋がっていて、海洋ゴミの80%が川由来という情報もあるので川をきれいにすることが海洋環境にとっていいことです。ゴミに国境という概念はないので、やっぱりゴミを出さないということが一番に言いたいですね。



道城征央（水中カメラマン）

1968年4月生まれ東京都在住。南太平洋のミクロネシア圏の水陸の自然を撮影するカメラマン。撮影した写真や動画を駆使して「人と自然の関わり合い」をテーマに都内で環境セミナーやワークショップを開催。埼玉動物海洋専門学校の講師も務める。

My COOL CHOICE
道城 征央



「ヨーグルト」 山口県産100%

「口に入るものは間違っではないけない」という理念のもと、安心安全な食べ物づくりのバイオニアとして挑戦を続け今年で50年を迎える秋川牧園。鶏肉、卵、牛乳、野菜など様々な品目の生産から加工、そしてお届けまで一貫して行っています。ヨーグルトは山口県萩市にある直営牧場で育てた乳牛の牛乳100%で作られています。飼育環境や飼料にこだわりのびのび育てた乳牛から搾った牛乳を使用しており、まろやかな酸味とコクのある滑らかな食感が特徴です。2021年度山口県特産品振興奨励賞を受賞。

株式会社秋川牧園
〒753-0303
山口県山口市
仁保下郷10317番地
Tel: 083-929-0630
<https://www.akikawabokuen.com>

COOL CHOICE SELECTION



「ソックス」 デニムの生産過程で誕生

100年以上の歴史を持つ広島県福山市のデニム生地メーカー篠原テキスタイル。廃棄物の減少を目指し、デニムを生産する過程の中で出る「残糸」と呼ばれる余った織布の糸や、様々な理由で廃棄されることとなった生地や製品を再度糸に作り直したというアップサイクルの糸を使用し、ソックスを作っています。旧式の編立機でゆっくり編み上げるので、柔らかく編み上げることができ、風合いが柔らかで履き心地抜群のソックスが完成します。履き心地だけでなく、環境に優しい点も魅力的な商品です。

篠原テキスタイル株式会社
〒720-1134
広島県福山市駅家町中島703
Tel: 084-976-1511
<https://www.shinotex.jp>



「FUROSHIKI」 廃プラスチックを 利用したごみ袋

「未来につながるリサイクル」を合言葉にゼロエミッションを目指して循環型社会への取り組みを続ける株式会社エコプラン。その取り組みの一つとして廃プラスチックを利用してつくったごみ袋「FUROSHIKI」があります。企業から使用済プラスチックを自社回収して製造することで99%リサイクル素材での製造を実現。特殊な製法により強い強度と伸縮性を実現しています。「ごみを捨てる」から「新しい資源提供へ」、リサイクルのループを目指します。

株式会社エコプラン
〒751-0849
山口県下関市
綾羅木本町7-17-13
Tel: 083-250-3700
<https://ecoplan21.net>



八谷英樹

の話

2021年4月に「Jチャンやまぐち」内でスタートした『エコの声』。「温室効果ガス削減」、「カーボンニュートラル」といった難解なワードが並ぶことが多い環境問題をわかりやすく伝えることで、視聴者に身近なこととして認識してほしいという趣旨で始まったコーナーです。

取材を通して、多くの企業が環境問題に熱心に取り組んでいることを実感します。一方で、その「発信力、アピール力」は企業によって温度差があるように感じます。つまり、環境問題やエコに対する価値観は人それぞれなのです。

ふと「エコとは何だろう?」と考えることがあります。難しいのが、取材ネタの取捨選択です。私たち放送局の悪いクセで「普通のことを取材しても視聴者の興味を引かない」「より刺激ある映像を撮りたい」と考えてしまうのです。これまでに放送した内容はそれぞれに特徴があり、見ごたえのある内容だと自負していますが、一方で視聴者により身近な内容にしてもいいのかなとも考えています。『『エコの声』を見て自分も実践した』など、視聴者の「エコー（反響）」が聞こえてくるような企画を展開していきたいです。

(山口朝日放送 アナウンサー)